

月刊

生産財マーケティング

2011

7

第48巻 第7号(通巻576号)
2011年(平成23年)7月1日発行(毎月1回1日発行)
ISSN 0911-9817

編集発行
ニュースダイジェスト社
<http://www.news-pub.co.jp>

定価 1年間12,600円(購読料12,000円・消費税600円)
1冊1,155円(購読料1,100円・消費税55円)

特集

企業若返り術

直線運動案内のトップメーカー。

「高精度」・「高速」…… 機械や装置のさらなる性能向上に貢献

THKでは、工作機械、半導体・液晶製造装置、産業用ロボットをはじめ、多様な業界のニーズにお応えできる多彩な製品バリエーションを取りそろえています。

THK株式会社

www.thk.com

THK
The Mark of Linear Motion

「親睦第一」とにかく会う

本音のやり取り、何か生まれる

日本小型工作機械工業会（日小工、長瀬幸泰会長）の若手経営者グループが「二意会」。第一の目標に「親睦」を置き、会って心通わせ、本音で語り合う。経営者としての問題意識を共有し、意見交換する。次代を見据えた勉強会などの活動も活発だ。業界団体の中でも指折りに元気な日小工で、「これから」を支えている。

元若手も、平均年齢は50歳

二意会は日小工の若手組織。次世代を担う経営者の集まりだ。今年5年目となる代表幹事務めている稲葉弘幸氏（54）（北村製作所社長）は、「親睦第一。とにかく会う。たまには思い出したように勉強している」と笑う。

春の通常総会と秋の工場見学の2回だった会合を、「健康づくり部会」（通称二意会クラブ）の発足で年4回ほどのゴルフ大会などを加え、「会う」回数を増やしている。「心の距離が縮まり本音で話し合える」、ビジネスのやり取りも増えてきた。

会員は31社31人。「元・若手経営者」の

顔もちらほら見られ、平均年齢は50歳。日小工には、第一線を退いた大ベテランの組織「経友会」もある。会員各社はそれぞれ特色を持ったメーカー。次代を見据えた勉強会などを



稲葉代表幹事

を通じ、メーカー各社の特色が融合、新しい何かを生み出す機会につながればという狙いもある。

日小工が会則の最初に挙げているのも「親睦」だ。稲葉代表幹事は「会則を作った昔の人たちはすごい」と感嘆しながら、「建前で付き合っていては何も生まれない。やはり頻繁に会うことが重要」という。

勉強会で学ぶ

若手もベテランも会社経営者として使命感は同じであり、「会社をどうするか、どの方向に舵を切るか」。稲葉代表幹事は、「短期的には震災後。中期的には自動車の電氣化で何が出来るか。部品の小型化は大



昨年の工場見学会はアイオー精密（岩手県花巻市）を訪問（写真は右上の稲葉代表幹事を除いて日小工・高橋洋二専務理事提供）



工場見学後の懇親会は浴衣姿

二意会 1983年設立、名称の由来は「二（＝二世）」と「意（＝意思、意欲、意気）」。「我々は二世である、だから一所懸命努力しよう」との思いが込められている。事務局は日本小型工作機械工業会（東京都港区）内



春には通常総会を開催



「リチーミング」の勉強会の1コマ。アンケート結果も「ためになった」と大好評。好評ゆえ7月にも東京と大阪で「リチーミング」の勉強会を開催する

きな潮流です。精度や高速化でいかにレベルを上げるか。人材育成も大きなテーマです。長期的には、めまぐるしく変化する市場でユーザーニーズに応えるためのプラスアルファをいかに形にするか」と語る。

二意会の幹事は、ミカドテクノスの伊藤隆志社長（42）、エグロの江黒寛文専務（46）、ナカニシの中西賢副社長（45）、古川精機製作所の宮澤栄司営業部長（44）、吉川鐵工の吉川智貴副社長（54）、会計監事に東京タッピングマシン製作所の石井孝治常務（51）。今期は二意会最年少である牧野フライス精機の清水大介社長（33）と、進興製作所の市川利之営業次長（42）も幹事になった。稲葉代表幹事は「今後の人材育成の意味でも」、清水幹事は「良い勉強の場。今後若い会員はますます増えるはず」と話す。

勉強会のテーマはさまざま。主に「こ



通称二意会クラブのゴルフ大会

れから」の話題を、幅広く勉強する。たとえば直近では、携帯電話メジャーのノキアの人事育成でも活用されたフィンランド式「リチーミング」をテーマに、チームワークをいかに作り出し、会社を活性化させるかを学んだ。

新しい何か

日小工のキーワードは「精密加工」。加工部品の小型化は顕著になっていく。メーカーとしては、ニーズを掘り起こし、それに応えていくための「新しい何か」を生み出す必要性が増すばかりだ。稲葉代表幹事は「日小工は会社も小型だから、各社が互いの良い所を交換して何かを生める。オーナー企業は合併などは難しいが、そのぶん緩やかなアライアンスを組めばいい」と語る。大きなキーワードとして「ものづくりを日本に残す」との強い思いも共有している。日本に残すべきものづくりとは、例えば工作機械や、日本にしか出来ない金型などだ。

「国内でこれからの核となる、高付加価値なものづくりを追求しなければならない」と稲葉代表幹事。日本が独自に育んできたものづくりの文化を、今後も大切に受け継いでいく。「一度火が消えてしまったら、再び立ち上げるのは難しい」。二意会には大きな使命感があるようだ。

（芳賀 崇）